

---

金石範「乳房のない女」論  
記憶を定位し直す語りの仕組みを中心に

---

CHO Suil  
趙 秀一

## 1. はじめに

金石範は一九五七年に「看守朴書房」（『文藝首都』一九五七・八）と「鴉の死」（『文藝首都』一九五七・一二）を発表し、作家としてのスタートを切った。しかし金石範という名前が日本の文壇や読者に知られるようになったのは「万徳幽霊奇譚」（『人間として』一九七〇・一二）が一九七一年上半期第六回芥川賞にノミネートされてからである。「一九七〇年前後」は「戦後はじめての朝鮮ブームが現出」した時期であり<sup>(1)</sup>、「在日朝鮮人作家の文学作品が「在日朝鮮人文学」として戦後の日本社会で可視化され、認定された」<sup>(2)</sup>時期でもある。その時期に『鴉の死』<sup>(3)</sup>が講談社より刊行され、金石範は作家としての新たな出発を歩みはじめたのだ。金石範の文学的営為が頂点に達したのは大長編『火山島』<sup>(4)</sup>であるが、本稿が注目するのは、金石範が『火山島』連載を始める前に「遺された記憶」（『文藝』一九七五・九）で一度作品化した題材を『火山島』第一部の連載を終えた時点で、再度形象化した「乳房のない女」である。なぜ金石範は一度作品化した題材に回帰し、語り直さなければならなかったのか。

一九八一年一月に発表された「乳房のない女」<sup>(5)</sup>は、在日朝鮮人作家である「私」が一九八一年という小説内の時間で、その二年前から続く韓国の惨澹たる情況、とりわけ「光州民衆化運動」における一連の国家暴力が行われている「いま」が引き金となり、かつて「済州四・三事件」<sup>(6)</sup>（以下、「四・三」と略記）の当事者から聞いた証言とそれに対する記憶を定位し直す物語である。物語は現在時の「私」が、「S」と過ごした約十年前の一夜と三十余年前に密航してきた「Sの母」と「K女」と過ごした対馬での一夜を回想した後、二年前から続

(1) 渡辺一民『他者としての朝鮮—文学的考察』岩波書店、二〇〇三、二〇九頁。

(2) 李孝徳「ポストコロニアルの政治と「在日」文学」『現代思想』青土社、二〇〇一年七月臨時増刊号、一五七頁。

(3) 新興書房版『鴉の死』（一九六七）には「看守朴書房」「鴉の死」「観徳亭」（『文化評論』一九六二・五）「糞と自由と」（『文藝首都』一九六〇・四）の四作が収録されている。そして講談社版『鴉の死』（一九七一）には四作の他、金石範が七年ぶりに日本語で書いた「虚夢譚」（『世界』一九六九・八）が新たに取められている。

(4) 『文學界』一九七六年二月号から一九八一年八月号まで「海嘯」という題名で連載された後、『火山島』と改題し、一九八三年に三巻本で文藝春秋より刊行された。さらに金石範は『文學界』一九八六年六月号から一九九五年九月号まで二回目の連載を行い、一九九七年に『火山島』全七巻を上梓した。韓国では一九八八年に第三巻

までが全五巻本（実践文学社、李浩哲・金石禧訳）で翻訳出版された後、二〇一五年、漸く全十二巻本（ポゴ社、金煥基・金鶴童訳）で全巻が翻訳された。日本でも二〇一五年、岩波書店よりオンデマンドとして復刊されている。

(5) 本稿における「乳房のない女」からの引用・頁数の表記はすべて『金石範作品集II』（平凡社、二〇〇五）に拠る。『金石範作品集II』の「作品改題」は、「乳房のない女」が「一九八一年五月に『文学的立場』第三号に発表された」（五九九頁）と初出の情報を示しているが、正確には、一九八一年一月発行の『季刊 文学的立場』（第三次）第五号である。

(6) 二〇〇三年一〇月に韓国の与野党合意で採択された『済州四・三事件真相調査報告書』は、「済州四・三事件」を「一九四七年三月一日、警察の発砲事件を起点にして、警察・西北青年団の弾圧に対する抵抗と単独選挙実施・単独政府樹立反対を旗印に一九四八年四月三日南労党済州

く韓国の状況を振り返る中でもたらされる疑問に対する答えをかつての証言者から得るとい  
う三章構成になっている。

高橋敏夫は物語の「背後にうかびあがる日本、韓国、そしてアメリカの国家的暴力の連続性」と「暴力の組織的隠蔽の連続性」に「注目すべき」だと指摘する<sup>(7)</sup>。高橋の指摘のように「私」の眼差しは常に「国家的暴力」に曝された他者に向けられており、「私」は絶えず他者の証言と、「組織的隠蔽」によって葬られた記憶を定位し直す営為を続ける。一方、金石範自身がしばしば「私」が回想する出来事に言及しており<sup>(8)</sup>、「私」は金石範の同名小説「看守朴書房」と「遺された記憶」を書いた作家として登場しているの、「私」と金石範とを綺麗に切り離して考えにくい。むしろ等号で結んで読むことを金石範は意図的に読者に働きかけているとも言える。

本稿はそのような枠組みを念頭に置き、まず「私」と金石範とを切り離し、「乳房のない女」という小説の表現と方法を、語りの時間と「私」の位相に焦点を当てて分析した上で、証言者に対する記憶を定位し直す「私」のあり方を明らかにする。それによって金石範が自分の存在をテキストに全面的に押し出すことの意味をも導き出されると思われる。

## 2. 想起する語り手

まず、冒頭と「S」との対話場面に注目し、語り手が出来事を回想する時間と出来事を提示する方法について検討する。

Sが母親と妻子を連れて北の共和国へ新潟からの帰国船で帰ったのは一九七一、二年ご

---

道党武装隊が武装蜂起してから一九五四年九月二日に漢拵山禁足地域が全面開放されるまでの済州道で発生した武装隊と討伐隊の間の武力衝突と討伐隊の鎮圧過程で多くの住民が犠牲になった事件であると定義している。(済州四・三事件真相調査報告書作成企画団、済州大学校在日済州人センター訳『済州四・三事件真相調査報告書<日本語版>』済州四・三平和財団、二〇一四、五五四-五頁)詳しくは、『済州島四・三事件「島のくに」の死と再生の物語』(文京洙、平凡社、二〇〇八)を参照されたい。

- (7)高橋敏夫「解説」『コレクション 戦争と文学 12 戦争の深淵』集英社、二〇一三、七一-三頁。  
(8)たとえば、「わが虚構を支えるもの」(『口あるものは語れ』筑摩書房、一九七五)、「誰かが書く」(『民族・ことば・文学』創樹社、一九七六)、金時鐘との対談集(文京洙編『なぜ書きつけて

きたか なぜ沈黙してきたか 済州島四・三事件の記憶と文学』平凡社、二〇〇一)、『[インタビュー]『看守朴書房』から『火山島』へーナショナルリズムの風景のなかで』(聞き手:小林孝吉、『社会文学』26、二〇〇七)、『金石範《火山島》小説世界を語る!』(インタビュー:安達史人+児玉幹夫、右文書院、二〇一〇)、『インタビュー 金石範 死者たちの語れなかった言葉を刻む』(聞き手:乙部宗徳、『民主文学』588、二〇一四)、「文学は政治を陵駕する—金石範」(中村一成『ルポ思想としての朝鮮籍』岩波書店、二〇一七)などに言及されている。さらに、小説「海の底から、地の底から」(『群像』一九九九・一一)においても小説家金尚として登場する「私」によって想起される。

ろだから、もう十年になる。彼は当時在日朝鮮人組織関係の建築技師をしていて、年齢は三十三、四になっていた。(三〇五)

語り手は「十年」前の出来事の回顧から物語を語り始める。しかしその「十年」前の出来事の時間は「一九七一、二年ごろ」と提示されているので、想起される出来事の時間が定かでないばかりか、出来事から「もう十年になる」と語る語り手の時間さえも定まらないことをまず指摘しておきたい。

小説の一章は「十親等の親戚」(三〇五)である「S」が朝鮮民主主義人民共和国へ「帰国」<sup>(9)</sup>する前に「私の家へ挨拶に立ち寄り一晩泊って帰った」時の出来事が語られる。冒頭から語り手は「S」と「S」の家族について語ろうとしていることが分かるが、そこに「Sの父」が存在しない。語り手は「朝鮮の氏族制度」(三〇五)について語った後、「Sは自分の父のことに触れながら、ショッキングな事実を私に話した」「初春のまだ肌寒いその日の晩」(三〇五)という出来事の時間に戻る。注目に値するのは直接話法で再現されている「S」の発話である。

「……あのね、兄さん、親父が死んでから、こんなことがありました。親父が死んだあとで遺品を調べていたら、日記が出てきたんです。親父はあのころ濟州島から日本へ逃れてきて、それから約十年間、兄さんも知っているようにほとんど寝たきりの闘病生活だったでしょう。そのあいだのことをいろいろと書いた何冊かの大学ノートの日記があってね。そこには、兄さんが密航してきたぼくのオモニ(母)たちを対馬まで連れに行ってくれたことや、そのあとの密航で失敗したぼくが大村収容所に収容されていたとき、兄さんが嘆願書をつくって来てくれましたね。その前後のことなども書いてあるんだけど……、それがね、こんなことを書いてあるんですよ。親父が濟州警察で拷問されているときに、オモニがその拷問の現場へ引っ張られてきて、それで<sup>ケ</sup>犬どもに親父の眼のまえで裸にさ

(9)一九五九年一月二〇日、日本赤十字理事会は帰国問題が政治と分離した人道問題であるとして問題の早期解決を訴え、これを受けて二月一三日、日本政府はついに「在日朝鮮人中北朝鮮帰還希望者の取り扱いに関する閣議了解」を発表するに至った。その後、一九五九年四月にジュネーブで日朝赤十字会談が始まり、八月一三日にインドのカルカッタで「帰還協定」(日本赤十字社と朝鮮民主主義人民共和国赤十字会との間の在日朝鮮人の帰還に関する協定)が正式に調印され、一九五九年一月一四日、新潟港から二三八世帯九七五人が北朝鮮の清津港に向かっ

た。(水野直樹・文京洙『在日朝鮮人』岩波書店、二〇一五、一三九―一四三頁)その後、一九八四年まで続くこのいわゆる「帰国運動」は、「当時の日本政府が在日朝鮮人を財政及び治安上の負担としてみていたこと、在日朝鮮人のほとんどが厳しい生活苦に直面していたこと、若い世代の教育や就職での差別という現実が存在していたこと」など様々な要素が影響していた。(朴正鎮「帰国運動」国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会(代表・朴一)編『在日コリアン辞典』明石書店、二〇一〇、八九頁)

れてから、ボジ（女陰）の毛にライターで火を点けられたらしいんですよ。そのときのことが忘れられないと、くどくどと書いてあるんだ。ちょっと驚きましたよ……」（三〇五-六）

「S」の発話が注目に値するのは、物語の一連の出来事に触れているからである。上の発話から分かる出来事の順序を整理しておきたい。「Sの父」は「済州警察で拷問され」た。その時、「Sの母」は夫の前で侮辱的な「拷問」を受ける。その後「Sの父」は「済州島から日本へ逃れて」くる。「私」は「密航してきた」「S」の「オモニ(母)たちを対馬まで連れに行く」。それから「密航で失敗した」「S」は「大村収容所に収容され」るが、「私」が「嘆願書をつく」るなどあらゆる手を使って釈放されたと推測できる<sup>(10)</sup>。また「Sの父」は「約十年間」の「闘病生活」の中で「日記」を書き続けた。彼の死後、「S」は父が書いた「日記」を読む。

以上のように「S」の発話によって示される出来事の順序は整理できるが、その明確な時間は定まらない。語り手は「S」の声を直接話法で再現して出来事を示すが、時間の情報は制御する。また「Sの父」が「済州警察で拷問され」た経緯も叙述されず謎に包まれたまま終る。「S」の発話から分かるのは、「Sの父」が何等かの嫌疑で「警察」に捕まり、罪の自白を強いる「警察」によって「拷問」を受けたということだ。後述の地の文で「彼は済州島四・三蜂起のたたかひのなかで逮捕されて拷問のあげく半身不随にな」（三〇七）つたと語られるので、「蜂起」に加担したという容疑で検挙されて「拷問」を受けたと推測できるくらいである。飛躍を恐れずに言うならば、「Sの父」は「八・一五解放後、家族を連れて大阪から帰国した」（三〇七）が故に検挙されたとも言えよう。故郷への「帰国」を選んだことが妻をも「拷問の現場へ引っ張られて」くる原因になり、妻が凄まじい「拷問」を受け、しかもその光景を自分の「眼」で見届けることにまで及んだ。その連鎖する自責の中で「Sの父」は「忘れられない」痛みを言語化し、そのエクリチュールによる自己語りは「S」によって事後的に「私」に伝達されたのである。

上の引用部は次のように続く。

「うーむ……」私は杯をゆつくり口に運びながら内心のショックを隠していたが、それにして、Sの淡々とした微笑を浮かべた話しっぷりはどうしたことだろう。彼の父が死ん

---

(10)「大村収容所」の正式な名称は法務省大村入国者収容所である。密入国者や在日朝鮮人の「刑余者も収容され韓国に強制送還された」。「公式的な説明としては拘留所ではなく船待ちの場所として、安全上の問題がなければ収容者の自由をできるだけ保障するとした」とされるが、

「一九五〇、一九六〇年代に処遇の改善要求や内部の政治的対立、収容者の自損行為、また民族組織による抗議運動が頻繁に起こり、「刑期なき牢獄」とも呼ばれた」場所である。（玄武岩「大村収容所」『在日コリアン辞典』、五二頁）

です。すでに十年になるその歳月のせいだろうか。それともその当時（済州警察での拷問というのは、一九四八年四月三日に起こった済州島四・三武装蜂起の当時のことだった）、母といっしょに済州島で生活していて、幼ない眼で虐殺のつづくふるさとの惨劇をすでに見てしまっていたということだろうか。（三〇六）

ここで「Sの父」は密航後「約十年間」「闘病生活」を続けたあげく、「一九七一、二年ごろ」から「十年」前に亡くなったことが分かる。後述の地の文で「Sの父」が「日本へ密航してきたのは、一九四九年の夏だったと思う」（三〇七）と語られるが、ここでも語り手は「と思う」を付け、記憶が明確ではないことを示す。しかしこの「一九四九年の夏」という時点を他の出来事の時間を定める一つの基準にしなければならない。大事なのは、語り手は「十年」というスパンで出来事を眼差していることである。

ところで「S」は「十年」前に読んだ父の「日記」について「ちょっと驚きましたよ……」と振り返る。それに対し、想起される「私」は「うーむ……」と口ごもってしまう。「内心のショックを隠していた」と、想起される「私」の内面が語られるが、「それにしても、Sの淡々とした微笑を浮かべた話しぶりはどうしたことだろう」という語りは想起される「私」だけの声なのだろうか。それは想起される「私」とは異なる位相をもつ語り手「私」の声としても捉えることができることに注意すべきである。本稿は「乳房のない女」が語り手「私」と過去の様々な時点における想起される「私」とが共存して展開されるテキストであることを念頭に置いて議論を進める。

「S」は「オモニ」を「拷問」した「警察」を「<sup>ケ</sup>犬ども」と称することで「警察」を権力側の走狗として位置付け、怒りを表しているが、その「話しぶり」が「淡々とした」ので、想起される「私」は「ショック」を受けながらも戸惑うしかない。語り手は「S」が「淡々と」「話」ができたことに対し、「日記」を読んで「十年」という「歳月」が経っていることと、「S」が「虐殺のつづくふるさとの悲劇」の当事者であることに因るのではないかと語る。しかし、疑問に対する解答はすべて「だろうか」という推測に留まっている。そこで、語り手は他者の内面への焦点化を回避しながらも、記憶の伝達の意味を掘り下げようとする姿勢を通して出来事を提示していることが分かる。

### 3. 想起の引き金と、証言に向き合うあり方

本章では語り手がいつ、何が引き金となって想起するようになったのかを論じた上で、想起される「私」の証言の受け止め方がいかに語られているかを分析し、語り手「私」の証言に向き合うあり方を明らかにしたい。

語り手が想起を行う理由は三章になって漸く分かる。三章の終盤で「十年」というスパンで回想されていた物語が二年前に縮まる。

一昨年十月十五日に釜山と馬山で死者三百人といわれる市民蜂起が起り、その十日ほど後の二十六日に朴正熙がKCIA 部長金載圭の手で、大統領警護室長車智徹といっしょに射殺された。(三一八)

二年前の「市民蜂起」はいわゆる「釜山民主抗争」<sup>(11)</sup>であり、「KCIA 部長」<sup>(12)</sup>による「射殺」は一九七九年十月二十六日に起きた朴正熙暗殺事件である。ここで語り手は一九八一年という時点で物語を語っていたことが明らかになる。さらに、語り手は朴正熙暗殺事件の約半年後の光州における「国家的暴力」に触れるが、それは「五・一八光州事態〔市民蜂起〕白書」(三一九、以下「白書」と略記)からの引用であることがテキストに明記されている。語り手とは違う次元の地の文の叙述者としての「私」の存在が浮き彫りになるが、上の引用部の後、「釜山、馬山蜂起につづく市民蜂起が十月二十九日にソウルで計画されていたが、それをキャッチした車智徹が、蜂起時には十万人くらい殺してもかまわぬと決意していたと、T・K生の

---

(11)一九七五年五月、「鮮明野党」の旗印の下に朴正熙強硬路線を主張する金泳三が野党・新民党の総裁になった。そして六月末訪韓したカーター米大統領は経済発展に見合った人権尊重を朴政権に求めて金泳三をバックアップした。それに対し、朴政権は金泳三を逮捕し、九月八日、ソウル民事地裁は、一部新民党議員の金泳三総裁職務停止仮処分の申請を受け入れた。不況の中での深刻な生活苦にくわえ、地元選出の金泳三への政府の仕打ちが引き金となり、釜山や馬山を中心に、市民・学生の反政府示威・暴動が起こった。こうした騒乱への対応をめぐる政権中枢に亀裂がはしり、朴正熙射殺事件にまで及んだのである。(文京洙『新・韓国現代史』岩波新書、二〇一五、一三四-六頁)

(12)中央情報部(KCIA:Korean Central Intelligence Agency)は「一九六一年六月一〇日、法律第

六一九号「中央情報部法」により設置された、国家再建最高会議直属の情報捜査機関・政治警察機構」である。「対共産主義活動と内乱罪・外患罪(国家の対外的地位を侵害する罪)・反乱罪・利敵罪などの情報収集と捜査を担当」する他、「反政府勢力への広範な監視・統制・摘発を行い、独裁政権維持のための暴力装置として機能するとともに、政府の諸施策を有利に進めるための世論誘導など、権力の末端神経の役割をも果たした」のである。全斗煥政権の「発足直前「国家安全企画部」(安企部)に改組された」後、「一九九八年、金大中政権の発足とともに権限が縮小され、名称も国家情報院と改められた」。(韓国史事典編纂会編『朝鮮韓国近現代史事典 第4版』日本評論社、二〇一五、三七七-八頁)

「韓国からの通信」は伝えている」（三一八）と語ることに注目する必要がある。

濟州島四・三事件当時の虐殺は世界が知らなかった。しかし一九八〇年代の光州は違う。世界という太陽の照らす白昼の光のもとで、敵都攻略さながらにして虐殺が行なわれた。そして私はその一端をテレビで見ただけだった。（三二〇）

想起される「私」は祖国で「行なわれ」る「虐殺」の「一端」を日本の「テレビで見ている」。「テレビ」の画面に流された「一九八〇年代の光州」の光景は「世界が知らなかった」「濟州島四・三事件当時の虐殺」とは違うが、「その一端をテレビで見ただけだった」という、感情を排除した語りから語り手「私」の憤りが感じられる。しかし、想起される「私」はただ「テレビ」を「見ただけ」ではなかった。前述したように「T・K生」の「韓国からの通信」と「白書」を読んでいたのである。地の文の叙述者としての「私」が引用する「白書」は『世界』一九八一年九月号に載っており、「昨年五月の光州事態において武器を握り韓国軍に抵抗し、いまは地下にあるグループによって作成された」「白書」には「光州事態に関わる最も詳細な報告であるとともに、韓国民衆化闘争に参加している若い人々の動向の一つを示すものといえよう」という「編集部」の注が振られている<sup>(13)</sup>。また、引用の「韓国からの通信」は『世界』一九八〇年四月号の「金載圭氏控訴審」である。「朴正熙独裁との闘争史、さらには朴以後にも続いた残党軍部にたいする民主憲政のための苦難史」<sup>(14)</sup>と評価される「韓国からの通信」は『世界』一九七三年五月号から一九八八年三月号まで池明観が「T・K生」の名で執筆したものである。池明観は「T・K生」と「匿名にしたのは、まずは監視の目を逃れ、何よりも韓国に残っている私の家族を守るためであり、執筆の材料は「一カ月に何回か秘密裏に韓国に送り込まれた、日本人をはじめとした多くの外国人が持ち出した資料に依拠しており、その中には公表が禁止された声明書、また、それにからむ数多くの悲しい物語が含まれていた」と振り返る<sup>(15)</sup>。想起される「私」は「テレビ」だけでなく、雑誌『世界』に掲載された「匿名」の証言者による記録の読み手でもあったのだ。そこで語り手「私」は一九八一年九月という時点で、過去の様々な時点における出来事を回想し、想起される「私」と証言者に対する記憶を定位し直そうとする主体であることが分かる。

小説の一章で語り手は次のように語っていた。

---

(13) 『世界』430、岩波書店、一九八一・九、一六七頁。

(14) 堀真清『一亡命者の記録—池明観のこと』早稲田大学出版部、二〇一〇、九二頁。

(15) 池明観『T・K生の時代と「いま」東アジアの平和と共存への道』一葉社、二〇〇四、八一頁。



アメリカ軍政下で密島化された故郷の凄惨な虐殺の状況は、ただ密航者によってのみ日本に住む私たちの耳にもたらされたのである。(三〇八)

語り手は、「故郷」が「アメリカ軍政下で密島化され」たが故に「世界が知らなかった」「四・三」は同郷の「密航者」たちの口伝で「私」だけでなく「日本に住む私たち」に知らされたと語る。「私たち」というのは「当時濟州島四・三事件が起きた程度のことは知っていた」が「どのようなものであるかは知らなかった」「私」を含めた在日朝鮮人や日本人のネットワークであろう(三〇七)。大事なのはメディアとしての「密航者」がいなかったら、「四・三」の実状を知らずにいたかもしれないという、語り手の秘められた思考である。

「私」に初めて「四・三」を具体的に証言したのは「Sの父」である。語り手は一章の末尾で次のように語る。

彼は病床で濟州島のことを話しながら、そして拷問の体験をも語りながら、しかし拷問されるその自分のまえで妻が陰毛をライターで焼かれた事実については一切口にしたことがなかった。彼の話聞き書きした当時の色褪せた古いメモに、「取調べながら横で強姦」という一行がある。ひょっとすると、そういった表現に、多分に強姦されただろう妻の場合を托していたのかも知れない。一般的な、他人の場合のそれでは決してなかったのだ。そうだとすれば、その一行は歯ぎしりのなかから吐き出されたことばだった。(三〇八)

「オモニ」に「親父」の「日記を見せながら訊いてみ」と、「オモニ」はただ「笑って」いたと、「S」は話した(三〇六)。そして語り手は「私は彼の母がそのとき、おそらく犯されたのだろうと想像したのである」(三〇六)と想起する。なぜ想起される「私」は彼女が「犯された」と「想像」できたのか。「S」の発話は「十年」にわたって両親のことを眼差し続け、朝鮮民主主義人民共和国に「帰国」することによって「私」に二度と会えないかもしれないという思いの中で、それまで他者に問いただすことのできなかつた質問を「私」に問いかけたものであったと言えよう。そしてその「S」の証言によって知らされた「事実」が引き金となり、「S」との対話場面における想起される「私」は、過去の「Sの母」と「Sの父」との場における証言と当時

の「私」を振り返る。

語り手は小説内の時間である一九八一年九月に、その「十年」前の「S」との対話場面とその「十年」前に亡くなった「Sの父」、さらにその「十年」前の「Sの父」による証言を同時に想起するという重層する時間に立ち向かっているのである。語り手は「Sの父」が「拷問の体験」を「済州警察の見取り図や留置場の配置、そして拷問室と呼ばれた査察係室の位置など」を「記憶を辿って地図に書き」、「到るところに残っている無残な拷問の痕を見せながら涙を押し殺して話した」と記憶している（三〇八）。しかし「Sの父」は「記憶を辿って」まで自分の「拷問の体験」を語り継ぐものの、「自分のまえて」「拷問され」た「妻」のことは「一切口にしたことがなかった」。「Sの父」は何度も話し手になって「四・三」と自分の痛みを語ったが、その度喚起されたはずの「妻」のことは語り得なかったのである。

注目すべきは「Sの父」の「話を聞き書きした当時の色褪せた古いメモ」の存在である。「Sの父」の証言の聞き手であった想起される「私」は、彼の証言を記録する書き手となって「取調べながら横で強姦」という一行を残している。「S」との対話場面における想起される「私」は自分の「想像」が裏付けられるその「一行」を見つけ出し、地の文の叙述者としての「私」は眼の前に「ある」「色褪せた古い」文字を、鍵括弧の中に書き込んだのである。「S」の証言が引き金となり、「Sの母」の「強姦」という痛みを「想像」する中で、「色褪せた」文字から浮上する生々しい光景に遭遇し、「想像」が可能性として存在する「事実」として紡がれたのだ。しかし、語り手は複数の記憶の想起によって遭遇した「Sの母」の「強姦」を、明白な「事実」として断言することを留保する。つまり、語り手は「メモ」を読み直しつつ、改めて判断しようとするが、「ひょっとすると」「かも知れない」と語るように「事実」として断言できないことを示す。断言を留保した上で、あり得るという可能性から「Sの父」による「取調べながら横で強姦」という証言の一部が「一般的な、他人の場合のそれでは決してなかったのだ」と、「想像」を確かなものとして納得したのである。勿論、誰も「口にしたことがなかった」にもかかわらず、「強姦」を「想像」し、それを語ること自体が暴力的であると言えなくもないが、本稿が強調したいのは、重層的な時間の中で想起される痛みを仲立に、「想像」を通して可能性として存在する「Sの母」の「強姦」に遭遇するというプロセスである。そしてそこに介在するのは、「取調べながら横で強姦」という「Sの父」の証言は、彼の身体に刻み込まれた視覚・聴覚・嗅覚の痕跡と「色褪せ」ることのない無力感や屈辱感と格闘する中で「吐き出された」

全身全霊の声であったことの痛感であるということだ<sup>(16)</sup>。

#### 4. 混じり合う声

証言者に代わって語る主体として不確かな事柄、つまり語られなかったことについては謎のままにするか、想像力を発揮して真実に迫ろうとしつつも断定は避ける語りの仕組みを考察することで、証言と記憶に向き合う語り手のあり方を明らかにすることができた。本章では、小説の二章で描かれる出来事が「S」の証言に触発されて想起されたことに注目し、出来事がどのような表現と方法で語られているのかをめぐって論じたい。

「Sの父」を通して「ようやく知識ではない一つのイメージを自分のなかに形作ることができるようになった」「私」は彼に頼まれ、「Sの母」と「K女」の二人を大阪に連れてくるために対馬へ向かう（三〇八）。それは「Sの父」が日本に来た「翌年」の「四月に入ってからだった」と語られているので（三〇八）、一九五〇年四月になる。想起される「私」は対馬へ向う船で戦前の「私服の監視の眼を意識して」「緊張感に見舞われた」が、「錯覚だった」のを悟って「安堵感」を覚える（三〇九）。さらに、対馬では「家々の石垣の塀のたたずまいに、同じく絶海の孤島済州島の石垣の草屋を思い起こ」（三一〇）す。このように語り手は想起される「私」への内的焦点化を通して対馬での一夜の世界に移動する。

想起される「私」は「炭焼き小屋まがいの家」（三一〇）で待っていた二人の女性から「一つのイメージ」が切り破られる「四・三」の風景を語られるが、まず次の引用部に注目したい。

私たちは早々にせんべいぶとんを布いて寝床に入った。闇のなかで行者のように坐禅を組むわけでもなし、寝床に横たわるしか方法がないのである。私が入口のほうに足を向け、真ん中にSの母、そして奥の壁際にK女が軀を横たえたが、狭い部屋なので互いの息遣いがすぐ耳もとで聞こえるのだった。（三一三）

想起される「私」は女性二人と薄い蒲団の「寝床に入っ」ている。「一切明かりを点けて

---

(16)長谷川博子は「戦争期のレイブの特徴の一つ」として「『集団で』あるいは人々の『面前で』行われること」を挙げている。「現場」に「居合わせた犠牲者の家族や近親の男たちは、仮に運よく殺されなかったとしても、レイブ実行者たちの威嚇のもとで『現場』に無力なままにとめおかれ、なすすべもなくレイブを見せつけられ、「その記憶が残」った「男たち」は「自分の妻や娘、母や祖母へのレイブ/暴力をやめさせるこ

とができず、彼女たちの身体と名誉を守ることができなかったことにより、激しい嫌悪と恥辱・虚無感におそわれる」という。（長谷川博子「儀礼としての性暴力—戦争期のレイブの意味について」小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、一九九八、二九三頁）

はいけない」と「主人が禁じている」ので(三一二)、早めに「寝床に入った」のである。注目すべきは「三十そこそこで色白の十人なみ以上の器量の持主」である「Sの母」と、「色はやや浅黒いが東洋人ばなれした容貌のかなりの美人」で「私より三、四歳年長と思われる二十七、八歳のK女」という、二人の女性に対する描写である(三一二)。「互いの息遣いがすぐ耳もとで聞こえる」「狭い部屋」で若くて美しい女性二人と「横たわ」っている想起される二十四歳の青年「私」の緊張感が伝わる。「坐禅を組む」というのはその緊張感の裏返しの表現でもある。戦前の「私服の監視の眼」を意識して「条件反射のように蘇った緊張感」(三〇九)と「安堵感」、そしてノスタルジアに続く奇妙な緊張感を覚える想起される「私」は予期せぬ感覚に戸惑っているのだ。

家の周りの木立ちや竹藪が夜の風に騒いでいた。はるか海の音が闇の無限の彼方から届いてくるようだ。私は耳の奥深い岸辺に打ち寄せる波の音に、ふと済州島の海を想像したりするが、しかし二人にとってはそういったものはもはや感傷にもならぬだろう。ここは想像のなかでも済州島などであってはならない。確実に日本本土への中継地、対馬でなければならなかった。(三一三)

語り手は「夜の風」に揺れ動く「木立ちや竹藪」の「音」を喚起する。そしてその「音」に「海の音」を感受する想起される「私」の聴覚に対し、「届いてくるようだ」と不確かな断定を今の感覚として語り、出来事の時間と並行する語りに変える。続く文では、「海の音」が想起される「私」の確かな感覚として語り直され、その「音」から思いがけず故郷を思い描く想起される「私」の内面に焦点化される。しかし、同じ文の中に想起される「私」の「感傷」に対し、「そういったものはもはや感傷にもならぬ」と、語られる時点の想起される「私」にとっては知る由もない彼女たちの思考が推し量られる。つまり、それは語り手「私」の推量による語りであるのだ。さらに、注目に値するのは「ここは想像のなかでも済州島などであってはならない」という一文である。これは誰の声なのか。地の文に叙述された言説なので、語り手の声と捉えられるが、「ここ」は語り手「私」が現に今いる時空ではないので、語り手「私」の声だとは言えない。文脈からすると、出来事の「ここ」にいる彼女たちの声と判断するのが妥当な読みであろう。しかし、彼女たちと想起される「私」との間でそのような会話は交されなかつ

たので、実際発話された彼女たちの声ではなく、出来事を想起する語り手が、必然的に考えられる彼女たちの声に代わって語る声として位置付けるべきである。続く「確実に日本本土への中継地、対馬でなければならなかった」の一文も同様であり、濟州島から朝鮮半島ではなく日本という目標地点「へ」と「密航」せざるを得なかった、それしか選択の余地がなかったことを逆説する重みのある言説である。

上の引用部は次のように続く。

もし、できるなら濟州島の話をしてもらえませんか。私は遠慮気味にたのんだせいもあったが（遠慮気味にしろ、濟州島の現実の実際を知らなかったから、そんなことをいえたのだ）、Sの母が最初に口を開いて、村人の強制見学をとまなう公開死刑や、その死体処理の模様などを話しながら、急に、あのねと、話を替えた。そして、この人は乳房がないんだよとK女のことをいった。さりげなく、まるで風の音のようにさりげなくいった。

「なんです？」

私は意味がすぐに掴めず、思わず上半身を起こすと、右横の闇の温もりに向って訊き返した。見えない相手の顔が傍にあった。

「胸がないのよ。乳房が二つともね、拷問で切り取られてしまったの……」（三一三）

想起される「私」はすでに「Sの父」から「故郷で起こっている恐ろしい虐殺の状況」について聞いていたので、「遠慮気味にたのんだ」のか。想起される「私」の内面に焦点化された「遠慮気味にたのんだせいもあったが」という語りに対し、地の文の叙述者としての「私」は括弧を用いて想起される「私」の内面を解釈する。「濟州島の現実の実際が知らなかったから、そんなことをいえたのだ」という解釈からは、予期せぬノスタルジアに触発されて「遠慮気味にたのんだ」かもしれないという後悔も感じられる。つまり、地の文の叙述者としての「私」の声には、問いを発して漸く彼女たちにとって故郷は「想像」したくもない死線の時空であったことを痛感した「私」の声と、「Sの母」の「拷問」というもう一つの「濟州島の現実の実際」を知り得たことで対馬での問いの危うさを痛感した「私」の声とが混じり合っているのである。また「遠慮気味に」でも「濟州島の話」を「たの」むことができなかつたら、彼女たちの声で「濟州島の現実の実際」を語り継がれることもできなかつたという語り手「私」の錯綜する声

としても位置付けることができる。

一方、想起される「私」の「右横」の「Sの母」は自分の「右横」に主体として存在している「K女」を「この人は」と対象化する。その声は想起される「私」にノスタルジアを呼び起こした「風の音」と呼応しながら「さりげなく」発せられたと語られる。つまり、語り手は極めて聴覚が尖っている時空を描いた上で、想起される「私」の「耳」に突き刺さる「Sの母」の声を配置し、語られた瞬間の衝撃を波及的に伝える。しかし「四・三」の実状と「K女」の身の上の凄まじい「話」を語る「Sの母」の思考や感情などは語られない。その点に注目して次章では、どのような表現の仕組みで記憶が定位し直されていくのかについて考察する。

## 5. 定位し直される記憶

無意識に身体を動かした想起される「私」は「見えない」が、確かに自分の「傍に」存在する「K女」に反問する。

「あう、Kさん、それは、ほんとうなんですか？」

私は問いにならぬ愚問を発したが、それ以外のことばが出なかった。

K女がそうだと答え、Sの母がそんなことを冗談でいえるもんじゃないと軽く笑いながらいったが、当人のK女がまた同じく低い笑い声で応じたのである。乳房を二つとも切り取られてなお生きている一人の女がすぐ傍の闇のなかに存在していることも驚きだったが、私は二人の女の淡々とした態度に圧倒された。乳房が二つともね……。豊満な胸をしたSの母が、相手を見下したような、他人事だといわんばかりの淡々とした口調でいう。しかも本人が、その微笑する顔が闇のなかに浮かび上って見えそうになるくらい淡々としていた。(三一三-四)

「問いにならぬ愚問を発し」て本人に確かめるしかない想起される「私」が、さらに「驚き」「圧倒された」のは二人とも「笑い声」を出したことと、「態度」と「口調」が「淡々としていた」からである。父が遺した「日記」から母が受けた「拷問」のを知り、その内容を母に確認してもらった上で、さらにそのことを「十年」にわたって胸に納めていた「S」が、それを語った際に見せた「淡々」と、「Sの母」が受けたであろう「強姦」に対する「想像」とが、

対馬での彼女たちの「淡々」さと結びついて想起する語り手「私」に感覚の転換を促した所以の表現である。つまり「豊満な胸をしたSの母」が「K女」を「無視したよう」だという表現は「S」の証言によってもたらされた、対馬における想起される「私」の受け止め方に対する嘆きの逆説であるのだ。

語り手は死を覚悟せねばならない密航の道程で不安を抱えながらも、開き直って生き延びようとする彼女たちの力を、「笑い声」と「淡々とした口調」という表現に託していたのである。彼女たちの生きていくために開き直るしかなかった時に表れた「淡々」さは、不安を抱えながらも希望を抱いて朝鮮民主主義人民共和国への「帰国」を選んだ「S」が、「帰国」の直前に両親の記憶を言語化して語った際に見せた「淡々」さに繋がり、語り手「私」は「Sの母」に対する記憶を定位し直すことができたのである。

「Sの母」の「話」を受けた「K女」は「自分といっしょに留置されていた一人の“女囚”、その同僚の話」を語る。それは「死刑」される直前まで「隠し持っていた」「一枚の白いタオル」を取り出して「訝かる人々のまえで、ひろげたタオルに自分の氏名と年齢、そして出身の村を書き込んでから、それを太腿に強く縛りつけ」て「死に赴く」女性の「話」である（三一四-五）。夫の目の前で凄まじい「拷問」を受けた「Sの母」は「K女」の痛みを語り、「乳房」を「切り取られ」た「K女」は「死に赴く」「白いタオル」の女性の痛みを語るが、その声は「豊満な胸をしたSの母」の身体を越え、彼女たちの「息遣い」とともに想起される「私」の身体に届く。重層的に積み重なった記憶と、証言の場における彼女たちと想起される「私」の声の循環が、対比される身体とともに描かれる。

いったい、どうしたことだろう。私は、いまだどこにいるのか。私はもうどこへも逃れることのできない真つ暗闇の穴に閉じ込められているような感じのなかにいた。私は自分が一人でないのを確かめるために、危うく傍の闇のなかにいるはずのSの母の軀に手を触れるところだった。私は空咳をした。空気が響いた。隣りの闇でSの母が身じろぎをした。そして彼女も乾いた空咳をする。……もし、できるなら濟州島の話をしてもらえませんか。白いタオルを太腿に縛りつけて死に赴く乙女……、それが濟州島の話であった。この人には乳房がないんだよ、胸がないのよ。乳房が二つとも拷問で切り取られてしまったの……。これが濟州島の話であった。闇、開いたきりの眼を黒い液体のようにひたした闇に、

想起される「私」は目覚めたかのように「私は、いまどこにいるのか」と自己を相対化して問いかける。地の文において想起される「私」の声を語る語り手「私」にとっても三十年前の対馬での一夜は、過去の出来事ではなく、時空を越えて「いま」「手を触れる」ことができる感覚的なものである。相互の「軀」は「傍の闇」に隔たっているが、その隔たりは「身じろぎ」をすれば、「軀に手を触れる」ことができる皮膚感覚として描かれる。一方、時制を越えた想起される「私」と彼女たちの対話は地の文の叙述者としての「私」によって多声的に書かれ、その「濟州島の話」は「それ」から「これ」へと距離が縮まる。さらに「これが濟州島の話であった」のように常体の過去形で想起した瞬間、語り手「私」の「眼」は「闇」の到来とともに「白い女の肉体」を喚起する。「黒い液体のようにひたした闇」の中で「白い女の肉体」が「浮か」ぶのは、語り手「私」が彼女たちのいた時空を「いま」の出来事として捉えているからであろう。その時制を越えて語り手「私」が「濟州島の話」の中の彼女たちがいた時空に吸い込まれていく瞬間がまさに「闇」である。

…この人には乳房がないんだよ、胸がないのよ……。対馬の夜の漆黒の闇の色が迫る。私は、あのときは、このような彼女たちであることを知らなかった。その肉体の疼きをふるさとの地の疼きとして感じ続けた彼女たちを、まだ知らなかった。それがいま同じ対馬の夜のなかから、地の呻きをその肉体にこめた女としてあらたに蘇る。その彼女たちの息遣いを耳もとに聞きながら闇のなかに軀を横たえていた隠れ家の夜を思うと、私は身慄いがして来る。闇が、透明な闇が光芒を放ちながら私を撃ってくるのだ。(三一八)

対馬での一夜を想起する「いま」、「Sの母」も「K女」も日本にいない。二人とも朝鮮民主主義人民共和国に「帰国」したのである。「S」と「Sの妻子」や彼女たちが「帰国」を決心したことには一言で説明できない事情があっただろうが<sup>(17)</sup>、「同じ」祖国の「地」とはいえ、「Sの父」が「八・一五解放後、家族を連れて大阪から帰国した」「ふるさとの地」という、もとの場所ではない「地」に「帰国」したのは、彼ら/彼女らが「肉体の疼きをふるさとの地の疼きとして感じ続けた」からである。それは自分たちの「肉体」と「ふるさとの地」とを、痛

(17) 朝鮮民主主義人民共和国や日本朝鮮人総連合会などのプロパガンダの影響は言うまでもなく、貧困や差別などと格闘せねばならない生活から抜け出すために「帰国」を選ばざるを得なかった在日朝鮮人が多い。帰国運動の最終回となる

一九八四年まで一八七回にわたり九万三三四〇人が朝鮮民主主義人民共和国に向ったのである。そしてその中に「日朝複合家族」、とりわけ一八〇〇名強と考えられている日本人女性配偶者（日本人妻）という存在も含まれていること



みが刻印された同じ「軀」として感覚していたことを意味する。語り手「私」はそのような記憶の連鎖の中で、本当の「済州島の現実の実際」を「まだ知らなかった」「あのとき」の時空を想起しているのである。そのように語られる「対馬の夜」は「いま」想起する語り手「私」の「眼」に「同じ対馬の夜」として、また「彼女たちの息遣い」が「同じ」感覚として、「身憚い」という身体の生々しさとともに「あらたに蘇る」。その過去と「いま」との時制の境界が崩れ落ちた「闇」の間隙から「光芒」が「放」たれるさまが「透明な闇」である。しかし「光芒」が見え、「透明」性を帯びているとはいえ、「闇」は依然として「闇」に他ならない。それは彼ら/彼女らの「肉体の疼き」も「ふるさとの地の疼き」も想起する時点における韓国社会で依然として続いているからである。「透明な闇」は相変わらず「まだ」「同じ」「疼き」が繰り返されている祖国の現状に対する語り手「私」の「疼き」のようにも読まれる。

彼女たちは勇ましい女闘士ではなかった。K女もSの母と同じように寡黙で控え目の、そして平凡な島の女であった。私は対馬の隠れ家へ訪ねて行ったとき、最初会った瞬間の印象、K女の美しいしかしかげりのある表情を思い出す。そして私は闇のなかの彼女の声<sup>ソバン</sup>が語った留置場での白いタオルと死刑場に向う同僚の話を、いや、後日私がそれを小説「看守朴書房」に生かして書いたその場面<sup>ソバン</sup>を思い浮かべる。……済州警察の留置場でね、こんなことがあったんですよ。いまでも眼のまえにはつきりその人の姿が映って、忘れることができないんだけど……。乳房をえぐり取られてからも、しかしそれでも生き残ってそして日本の島まで逃れてきたK女の死者への弔いのことばだった。(三一八、傍線引用者)

「K女の死者への弔いのことば」は「彼女の声」に留まらず、作家である「私」の「ことば」で「小説」となり、さらには語り手「私」の「声」として地の文に語られる。上の傍線部は「K女」と「看守朴書房」の書き手である「私」、そして「乳房のない女」の語り手「私」という三者の「声」が入り混じった言説である。つまり「留置場での白いタオルと死刑場に向う同僚の話」は「彼女の声」によって想起される「私」に語られ、作家の「私」はそれを「小説」に形象化することで「白いタオル」の女性と「同僚」となったのである。それゆえに語り手「私」は「はつきりその人の姿」を「思い浮かべる」ことができたのだ。証言する彼女たちの聞き手だった「私」が書き手/語り手となった原動力は「寡黙で控え目の、そして平凡な島の女」である彼女たち

---

も忘れてはいけない。詳しくは『帰国運動とは何だったのか—封印された日朝関係史』(高崎宗司・朴正鎮編、平凡社、二〇〇五)を参照されたい。

の「勇まし」さに遭遇した対馬での一夜にあったと言える。それというのも「大阪へ来てからは、Sの母も一切黙して過去を、ふるさとの出来事について語らなかった」（三一七）からである。

光州虐殺の有り様については、私が説明するまでもなく、読者諸氏に思い起こしていただきたいと思う。なにかに酔っぱらった空輸兵たちが妊婦を刺し殺し、女の子の乳房をえぐり取ったことなど、学生たちが銃剣で刺し殺されたことなど……の無数の殺戮のやり方。これらのおそらく信じがたい、目撃者である光州市民でなければ信じられぬ事態を、いや、それは事実だ、この国では事実なのだ、三十余年前の対馬の隠れ家で会ったK女やSの母、そして死んだSの父がいま私に証言するのである。（三一九）

語り手は光州における過剰暴力の「有り様」を喚起しながら、過去の様々な時点における「私」を召喚し、各々の記憶を定位し直す中で、新たに「K女やSの母、そして死んだSの父」の「証言」に出遭う。「虐殺」の時空から生き残った「目撃者」でないと、「事実」として確信することが困難かつ不可能に近い「殺戮」の「事態」に対し、語り手「私」は原点となる記憶と語り直された「小説」の記憶を位置付け直すという格闘の中で、彼ら/彼女らの「歯ぎしりのなかから吐き出された」「証言」は「この国」の「光州虐殺」の「目撃者である光州市民」の「いま」の「証言」に他ならないと痛感するに至ったのである。

「私」は「新生朝鮮の再建に希望を持つて」「独立した祖国へ」引き揚げたが、「解放の翌年の夏、ソウルからふたたび日本に舞い戻った」人物であった（三〇九）。その後、「新生朝鮮」だったはずの祖国は南北分断と朝鮮戦争を経て、更なる暴力を吸収した冷戦状態が続く中、一九六五年六月二二日、日本と韓国のみ交渉で「日韓基本条約」が調印されたことは言うまでもない。日本に「舞い戻った」「私」は小説内の時間の「いま」まで大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に分断された祖国を、「S」の家族と「K女」といった証言者の痛みとともに眼差し続けてきたがゆえに「この国では」と、時空を越えた語りで祖国を指し示すことができたと言えよう。

## 6. おわりに

本稿は「光州虐殺」の「いま」が引き金となり、痛みを伴う様々な時点における出来事を

想起することで、「四・三」の証言者の声とエクリチュールをめぐる想起される「私」の記憶を定位し直す語り手の営為を考察した。語り手は他者の内面への焦点化を回避すると同時に、不確かな事柄は謎のままにする一方、伝達された痛みや記憶の意味を掘り下げようと試みる、証言者に代わって語る主体であることを指摘した。そこで導き出されたのは、「乳房のない女」は想起する語り手「私」と想起される「私」、地の文の叙述者としての「私」という複数の位相をもつ「私」の声と、想起される出来事における証言者の声とが、時制を越えた語りの中に混じり合っている多声的なテキストであることであった。また、想起される「私」への記憶の伝達は二つの構造に支えられていることも明らかにした。一つは「Sの父」による自己語りである。「Sの父」は想起される「私」に自分の痛みを語り、「S」によって事後的に伝達された「日記」も自分の痛みを語るものであった。想起される「私」に対馬での出来事を定位し直すように働きかけた、エクリチュールの自己語りによって記憶が伝達されたのである。一方、「Sの母」と「K女」による記憶の伝達は、自己を語らず他者を語ることであった。「Sの母」は「K女」の痛みを語り、「K女」は死者となった「白いタオル」の女性の痛みを語る。それは他者の痛みを眼差し、自分の痛みを対象化し得たが故に可能となったと言える。物語はこのような記憶伝達の構造に支えられている。語り手「私」は、記憶伝達の過程において全存在が揺るがされた想起される「私」の、それらの記憶に立ち向かうあり方を語ったのである。さらに「私」は伝達された死者と生者の記憶を、「小説」を媒介に語り継ぐ道を選んだ書き手でもある。つまり、「私」は「小説」を書く文学的営為を通して語り継がれた者としての応答責任を全うし、証言者の「死者への弔いのことば」を語り継ぐ新たな証言者になったのである。

金石範は『火山島』第一部の連載を終えた時点で、「光州虐殺」の「いま」が引き金となり、自分の全存在を揺るがし、「小説」を書かせた原点となった出来事を「いま」の出来事として定位し直し、「看守朴書房」の「白いタオル」の女性に関する証言が語り継がれた過程を「Sの母」と「K女」といった女性たちの声で語らせると同時に、書き手として「四・三」を書き継ぐ意義と原動力を、「乳房のない女」という小説を通して形象化したのである。

【付記】本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

